



あの濡れた夏



あてのない旅の途中。
昼寝から目覚めると
そこには一人の少女が立っていた。

「旅の方ですか？」

「あ、ああ……」

「そうですか。フフ」

(地元の娘かな……？
何が可笑しいのだろう？
…それにしても、
なんてイイ体しているんだ。
しかも、ブラをつけていない……！？
…ゴクリ。)

「私の体に興味ありますか？」

「え……？」

「長旅の疲れ、癒してあげますよ？」

(な、何を言ってるんだ？ この娘は。
あ、パンツが濡れてる……)



「な、何するんだ、君！？
こんなところ
誰かに見られたらマズいよ！」

「そんなこと言ってお兄さんのココ、
こんなに固くなってますよ？」

「うっ、ああ…。」

「それにここは、見ての通り
人気のない田舎町なので、ご安心を。
ウフフ。」



「そ、そういう問題じゃ…うっ」

「ほら、気持ちイイですか？」

(なんて手つきなんだ…！
細い指がチンポに絡みつくように扱われる！)

「フフッ、すごいビクビクしてます。
いっぱい出していいんですよ？」

「くっ…！
だ、駄目だ…！
それ以上されたらもう…！」



「こんなの…
ガマン出来るわけ無い…!」

「我慢する必要なんてありません？
フフッ。
あっ…お兄さんの
太くて固いのが入ってきます…!♡」

ズカッ

ヌルッ…

(うあっ、スゴイ…。
俺のモノが
どんどん飲み込まれていく…!)

「あつ、ああ！
奥まで入って…ん、ああつ！」

「くうっ…、イイ締め具合。
アソコも凄い濡れてるぞ。
君は、本当にいやらしい娘だな！」

「あつああん！
そこっ…もつと、もつとお！」

「ほらっ、ここがイイのか！？
ほら、ほらあ！」

ズッ
ズッ

「あんっあんっああん！
私、もうイきそう…！！
お願い、このまま中に出してえ！」

「え？　そ、それは…
うっ…！　だ、駄目だ！
出る！」

「あっあああああああああ！
熱いのが、奥につ…
いっぱい出てます…！」

ド
ビ
ッ

ムク
ムク

(気持ち良すぎて
思わず中に出してしまった…。
……ええい、毒食らわば皿までよ！)

ビ
ッ



突然の雨。
無人の駅舎に逃れた俺たちは、
濡れた体も気にせず行為を続けた。

(出会ったばかりの少女とする背徳感……！
この娘のアソコの具合の良さ……！
もうっ、腰がっ……止まらない！)

「あん！ あん！
すごいっ……
さっきよりも……はっ、げ……しい！
あっあっ、ああん！」

ズポッ

ズ
ジャッ

「はあっはあ、すごいぞ。
君のアソコ、グシヨグシヨだ。
雨に濡れた体よりもっと濡れてる」

「だって…、あなたが…
気持ち良くしてくれるから…!!
あっああん！」

「よし、じゃあもっと
気持ち良くしてやる！
ほらっ、どうだ!?!」

「あん! あん! あん!
駄目ええええええ!
いくうっ、イっちやうよおおおお!」

ズポッ

ズグッ

「くっ…俺も、もうイきそうだ！
このまま中で出すぞ！」



「熱いのがっ…いっぱいっ…
入ってきます！
あっ…あああああああああ！」

「すごいぞ……！
君のアソコ、まだビショビショだ！」

「だって、私まだ満足できないから……
お願い……！ もっと欲しいの！
あなたの精液、いっぱい、出して……！」

「よしっ、じゃあ……これで最後だぞ！
俺の全部、膣で受け取れよ！」


「あああああああああああああああ！
いっぱい…いっぱい出てるよおおおおお！
頭、真っ白になっちゃろうろうろうろうろうろう！
…！」

ビクッ
ビクッ

オ
シ
ビ

ビク
ビクッ





「はあっはあ…
すごく、気持ち良かった」

「うん、私も…！
もう、あなたのカラダから
離れられない…！」

「ああ…。そうだな、もうしばらく
この街にいてみても、いいかもな…！」

































